

研究ノート Research Note

# インド・アッサム州，ブラマプトラ川氾濫原における ムスリム移民の生業活動と土地利用

― ヒンドゥー教徒住民との比較を通して ―

浅田 晴久\*

**要旨：**インド北東地方に位置するアッサム州は，ムスリム人口の比率が高い州の1つである。アッサム州内のムスリムの大多数はイギリス植民地時代の東ベンガルや独立後の東パキスタン，バングラデシュから移住してきた人々であるが，その人口は2011年センサスで州全体の34%に達している。ムスリム移民の増加は在来民との間にしばしば衝突を起こしてきたが，これまでは現地調査に基づくムスリム移民の実態に関する研究はほとんどみられなかった。本研究ではブラマプトラ川氾濫原に居住するムスリム移民と在来民との間で生業活動や土地利用にどのような差異がみられるのかを明らかにし，アッサム州社会におけるムスリム移民の位置づけを議論した。その結果，ブラマプトラ川の氾濫原地帯に居住しているムスリム移民は在来民とはまったく異なる技術を用いることで集約的な土地利用を実現していることが明らかになった。彼らの生業活動は在来民にとって脅威と捉えられてきたが，居住環境や生業形態が異なることから，経済的にはむしろ2つのコミュニティは共存できる関係にあることも示唆された。

**キーワード：**アッサム州，氾濫原，ムスリム，技術，土地利用

## I. はじめに

本稿ではインド北東地方，アッサム州のブラマプトラ川氾濫原に居住するムスリム移民の生業について，主として現地調査に基づき報告を行い，ヒンドゥー教徒が過半数を占めるアッサム州社会の中での彼らの位置づけを再考する。

インド北東地方に位置するアッサム州は，国内でも西ベンガル州やパンジャブ州と並んでムスリム人口の比率が高い州の1つである。歴史的にヒンドゥー教徒が住民の過半数を占める中，アッサム州のムスリム人口はセンサスが実施されるたびに増加の傾向を示しており，20世紀初頭の1911年には全人口の16%に過ぎなかった比率が，印パ分離独立後の1951年には25%になり，最新の調査が行われた2011年には34%に達している（表1）。

アッサム州に居住しているムスリムは，地元住民（特に非ムスリム住民）の認識ではアッサム・ムスリム，ベンガリ・ムスリムの2つに大きく分けられる。アッサム・ムスリムは17世紀にムガル帝国が東方へ進出し，当時アッサム州を支配していたアホム王国と衝突を起こした際に捕虜となりこの地に住み着いた者が主な起源とされている（Gait, 1906; Ahmed, 2010）。彼らはアッサム州外に出自をもつマイノリティであった

が，早くから在来民の風習を取り入れて生活し，現在もヒンドゥー教徒と良好な関係を保っている。一方のベンガリ・ムスリムはイギリス植民地時代の19世紀末から，ジュート栽培と食糧増産を目的とする政策で東ベンガル（現在のバングラデシュ）から現在のアッサム州に移住してきた人々である（Saikia, 2014）。20世紀に入り，東ベンガルから東パキスタン，バングラデシュと地域呼称が変わっても，人口稠密なこの地域からアッサム州へのムスリムの流入は継続してみられ

表1 アッサム州における1901年から2011年までのムスリム人口の推移

	総人口 (万人)	ムスリム人口 (万人)	比率 (%)
1901	329	50	15
1911	385	63	16
1921	464	88	19
1931	556	128	23
1941	669	170	25
1951	803	200	25
1961	1,084	277	26
1971	1,468	359	24
1991	2,241	637	28
2001	2,666	824	31
2011	3,117	1,066	34

資料：Government of Assam (2014) より作成。

\* 奈良女子大学大学院人文科学系

た。特に1971年のバングラデシュ独立に際しては多数のムスリムがアッサム州へ流入し、1980年代にアッサム州全域で大きな社会問題を引き起こすことになった (Baruah, 1999)。1980年代に外国人排斥運動が高まって以降はアッサム州にやってくる移民の数は減少したが、それ以降も洪水や河岸浸食で土地を失ったバングラデシュ住民が親類等をたよって移住するケースが続いているとされる (Dikshit and Dikshit, 2014)。

東ベンガルからはムスリムだけでなく、ヒンドゥー教徒の移住もみられた。特に1947年の印パ分離独立の際は、東ベンガルから多数のヒンドゥー教徒が難民としてアッサム州に流入した (Dikshit and Dikshit, 2014)。アッサム州で彼らはベンガリ・ヒンドゥー、または単にベンガリと呼ばれ、同じベンガル人でもベンガリ・ムスリムとは明確に区別されて人々に認識されている。ベンガリ・ムスリムが主として農民から成るのに対し、ベンガリ・ヒンドゥーは農民に加えて書記や商売人などさまざまな職能集団として移住してきた者が多い。ヒンドゥー教徒主体のアッサム州社会では、ヒンドゥー教徒であるという点では共通しているものの、アッサム語を母語とする「アッサム人」とは異なり、彼らはベンガル語を母語にしているため、やはり在来民とは別の集団として識別されている。ただしベンガリ・ムスリムとは異なり、服装や生活習慣上の特徴は在来民との差異が小さい。外でアッサム語を話す際の微妙なイントネーション、姓や家族の出自を聞かない限り、ベンガリ・ヒンドゥーを見分けることは困難である。

このようにアッサム州で一定の人口割合を占めるムスリムであるが、その実態に関して調査した研究事例は必ずしも多くない。比較的行われてきたのがアッサム・ムスリムに関する調査である。たとえば、アッサム州内のアッサム・ムスリム(その4分類の1つであるモリア・ムスリム)の村落を複数箇所調査した Guha は、ヒンドゥー教徒と長年の接触の結果、彼らの言語、衣服、食習慣などで「アッサム化」が進んでいると指摘している (Guha, 2007)。他にも、アッサム・ムスリムは多宗教・多民族から成るアッサム社会の発展にポジティブな役割を果たしているという言説がみられる (Ahmed, 2010)。このようにアッサム・ムスリムとヒンドゥー教徒との関係は、「アッサム人」の寛容さを示す事例としてしばしば引き合いに出される。

一方でベンガリ・ムスリムについてはいささか評価が異なっている。アッサム州内の異なる生態環境地区で村落調査を試みた Bhagabati は、ムスリム移民は在来のヒンドゥー教徒が住んでいなかった河岸の氾濫原

や中州地帯に住み着き、独自の生業活動を行っている」と報告している (Bhagabati, 1999; Bhagabati, 2004)。在来の部族民(ティワ族)の土地問題を聞き取り調査した木村は、バングラデシュから移住してきたムスリムはいち早く新技術を導入して、アッサム・ヒンドゥーや在来の部族民の土地と生活を脅かしていると述べている (木村, 2012)。このようにアッサム州の中でベンガリ・ムスリムは、ヒンドゥー教徒の在来民とは相容れない異質な存在として捉えられている。

比較的新しい時代に移り住んできたベンガリ・ムスリムに対して、アッサム州の在来民が警戒感を抱く理由は、この地域の複雑な歴史とも関係している。現在のアッサム州でイギリスによる直接支配が始まったのは、第一次英緬戦争(1824-26)後にヤンダボ条約が締結されてからのことである。イギリスは当初アッサム地方の支配に積極的ではなかったが、ベンガル地方で不足してきた木材資源の供給地としてこの辺境地の開発が始められた (Saikia, 2011)。その後、野生の茶樹の発見 (野間・ロシャン, 2011)、石油・石炭という地下資源の発見などにより、開発が徐々に加速化していくことになる。19世紀末以降はベンガル地方からの移住を奨励して、食料基地として余剰耕地を開拓することも進められたのである (Guha, 2006; Saikia, 2014)。

ここで指摘しなければならない点は、植民地政府や外部の巨大資本、独立以降はインド政府に引き継がれて行われた一連の開発行為は、地元にはほとんど恩恵をもたらすことがなかったために、地域の資源が一方的に搾取されてきたという意識を住民に植え付けることになったということである。現在もアッサム州の住民(特に古くからの在来民)の間では、州内には天然資源が豊富にあるにもかかわらずその資源が外部へ流出しているせいで自分たちはいつまでも貧しいのだという言説が根強く信じられている (Baruah, 1999)。現代のムスリム移民に対してアッサム州の在来民が過度に警戒感を抱くのも、彼らを土地という資源を脅かし、地域の発展を阻害する存在とみなしているからである。この住民感情を意図的に煽る目的で、ベンガリ・ムスリムの移民を違法な侵略者であると断定し、パキスタンの情報機関 (ISI) との関連をほのめかすなどして、現状のままではアッサム州社会が彼らに乗っ取られて在来のヒンドゥー教徒がマイノリティになってしまうと主張する書籍も一般向けに多数出版されている (たとえば Bhattacharyya, 2001; Harlalka, 2008; Mishra, 2014)。しかしこれらの書籍は必ずしもアッサム州のムスリム移民の実態について丁寧に調査した上で執筆

されたものではない。ベンガリ・ムスリムの排斥を主張している勢力が、ムスリム人口の統計や新聞記事<sup>1)</sup>などの資料を自説に合わせて都合よく利用しているにすぎない。

アッサム州社会においてムスリム移民に対する偏見が広まっている最大の原因は、ムスリム移民の村落内部で行われる活動がほとんど外部に明らかにされていないためであると考えられる。州内の大多数のヒンドゥー教徒住民、そして地元の研究者でさえもムスリム移民の居住地に立ち入ったことがある者は少なく、それゆえに多くの住民が事実と反したデマや扇動に容易に影響されてしまう状況が生み出されている。ムスリム移民の虐殺事件を調べた研究においても、住民間の対立が大規模な衝突に発展した背景には、反外国人運動指導者に煽られた在来民が危機感を抱いて行動に移したことが指摘されている (Kimura, 2013)。問題の解決が困難であるのは、マイノリティであるムスリムの側も部外者からの干渉を過度に警戒していたため、これまで村落内部の立ち入り調査が容易に行えなかったという事情も関係している。

以上のような問題意識を念頭に、本研究はブラマプトラ川氾濫原に位置するムスリム村落を訪問し、そこで実際に行われている生業活動を詳細に記載することを目的とする。その際に注目したいのはローカルな自然環境とその利用法についてである。アッサム州の社会問題に関する従来の研究では、土地資源をめぐる問題においてさえ、自然と人間の関係の視点が欠如して

いたように思われる (たとえば木村, 2012)。そこで、文化的背景の異なるコミュニティがいかにか自然資源を利用してきたかという文化生態学の視点 (横山, 2013) を導入することで、アッサム州社会におけるムスリム移民の位置づけを捉え直したい。現地調査は2013年8月から2015年8月までに合計6回実施した。

## II. 対象地域

本研究はアッサム州中部のナガオン県を対象とする (図1)。ナガオン県はアッサム州を東西に流れるブラマプトラ川の南岸に位置し、県の南側はメガラヤ丘陵とナガ丘陵に連なる、平均標高1,700mのバレイル丘陵に接している。南の丘陵地帯から流れてくる小河川と、ブラマプトラ川の本流から派生する河川的作用により、県の北側には平坦な沖積地が形成されている (Kar, 2012)。ブラマプトラ川の近傍は、本流の季節的な氾濫により雨季に湛水する氾濫原地帯となっており、その幅は狭い箇所では本流から5 km、ナガオン市付近では本流から25 kmに達する (図2)。ここは砂質性の土壌が卓越し、水量が過剰になるために本来は人の居住には適さない土地である。イギリス植民地時代の報告書には、「ブラマプトラ川の南側は大部分が高い葎に覆われており、乾季作のために部分的に切り開かれるのみである」と記述されている (Allen et al., 1909)。かつてはゾウやトラなど野生動物が豊富に居住していた地域であり、1972年にはこの氾濫原地帯の中に70 km<sup>2</sup>の面積を有するラオコワ野生動物保護



図1 対象地域

注1：標高300 m以上の地域に色をつけてある。

注2：図中の囲みは図2, 3, 4の範囲を示す。

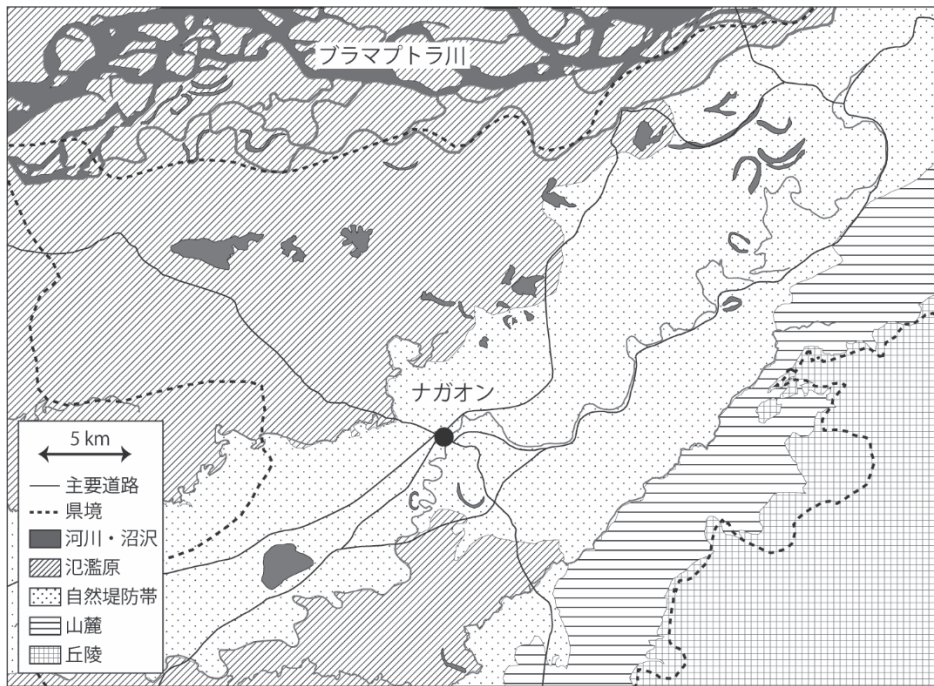


図2 ナガオン県中心部の生態環境区分

資料：インド測量局発行の5万分の1地形図および  
National Remote Sensing Centre の Indian Geo-Platform of ISRO より作成。

区が設立されている。氾濫原地帯の南側にある自然堤防帯は、直接的にはブラマプトラ川の氾濫水の影響は受けないものの、中小の河川が形成した自然堤防、後背湿地、三日月湖、ビール（ビル）と呼ばれる湖沼が多数点在している。県庁所在地でこの地方の中心都市でもあるナガオン市はブラマプトラ川河岸から約30kmの地点に位置しており、氾濫原地帯と自然堤防帯の境界付近にある。ナガオン市は19世紀末から茶やジュートの集荷地として発達し（Barooah, 1978）、現在も東西に伸びる国道や鉄道の中継地点としてブラマプトラ川南岸地域で重要な位置を占めている。ナガオン市の人口は約15万人（2011年）である。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査地の民族居住地分布

ナガオン県はアッサム州内でもムスリム人口の割合が最も高い県の1つであり、2011年度センサスでは、県人口282万人のうち約55%の156万人がムスリムである<sup>2)</sup>。既存研究ではアッサム州に移住してきたムスリムは在来のヒンドゥー教徒住民がそれまで居住していなかった氾濫原地帯に最初に進出したとされてきた（Bhagabati and Das, 1992）。また筆者はアッサム州東部のロキンプル県において、居住地域が民族毎にゆるやかに分かれていることを明らかにしている（浅田, 2014a）。そこで本研究でも、特定の村落で調査を始める前に、ナガオン県内の広域を対象にムスリム

居住地を把握することにした。

居住民族の情報は村落レベルのセンサス（village directory）には含まれていない。そこで浅田（2014a）で用いた手法に基づき、住民への聞き取り調査によって、ナガオン県の各村落の居住民族情報を明らかにした。ここで対象としたのはナガオン県内の全9つの郡（revenue circle）のうち、県の中部から北部に位置するナガオン、ルポヒ、ディン、サマグリの4つの郡である。4郡に含まれる全520の行政村のうち、499の村について主要な居住民族に関する情報を得ることができた。その結果、499の村の中で最も多かったのが、ムスリム移民（ベンガリ・ムスリム）が過半数を占める村で192村、続いてアッサム・ヒンドゥー教徒（アホミヤ<sup>3)</sup>）が146村、ベンガリ・ヒンドゥー教徒が8村、チベット=ビルマ語族系の指定トライブであるラルン（ティワとも呼ばれる）が7村、同じく指定トライブであるボド、カチャリ、カルビがそれぞれ5村、7村、12村であった。それ以外に、茶園外トライブの村が8村、シク教徒が住む村が2村、ネパリが住む村が2村あることが分かった。複数の民族が混住しており、聞き取り調査からは主要な民族が判別できない村は、混住村としたが、110村あった<sup>4)</sup>。

これらの結果を分布図にまとめると（図3）、ナガオン市とそこを通過する国道から南側の丘陵の麓にかけてはアホミヤ中心の村落が分布しているのに対し、ナガオン市から北のブラマプトラ川河岸の間にはムス

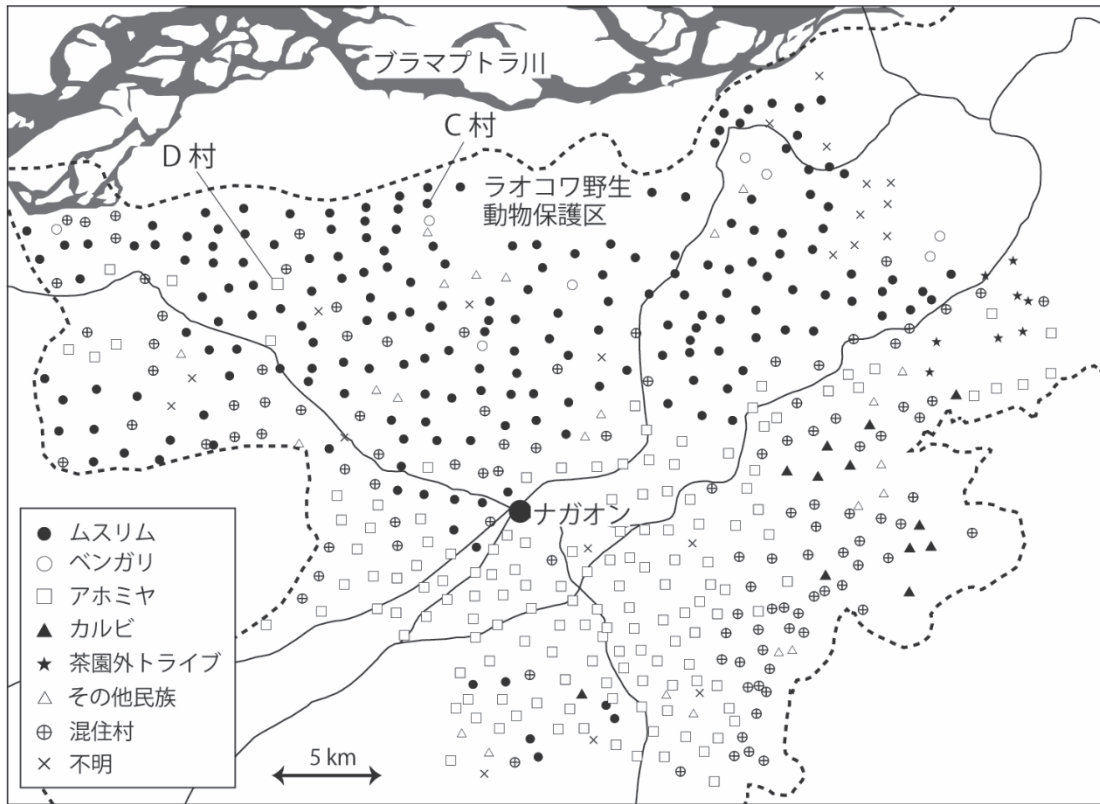


図3 ナガオン県中心部の現在の村落分布

注1：ナガオン県中心部の Nagaon, Dhing, Rupahi, Samaguri の4郡 (Revenue Circle) に含まれる行政村を対象とした。

注2：「その他民族」には、ボド、ラルン、カチャリ、シク、ネパリが含まれる。

資料：2011年度センサス村落要覧、現地調査より作成。

リム中心の村落が多数分布していることが分かる。この分布パターンは図2の生態環境の境界にも一致している。すなわち河川水の季節的な氾濫がみられる地域に主としてムスリム移民が住み着き、本流からの氾濫水が到達しない内陸側の自然堤防帯にアホミヤが居住しているのである。対象地域南部の丘陵地の付近には、茶園外トライブの村落とカルビの村落、および両民族の混住村がみられる。その他の指定トライブの村落は、アホミヤやムスリム移民の居住地域の間に点在して立地している。

ムスリム移民はいつの時代からブラマプトラ川近傍の氾濫原地帯に住み始めたのだろうか。住民からの聞き取り調査では明確な移住年代については回答を得ることは困難であった。そこで過去の地形図を利用して、現在の村落がいつ頃地図上に出現したかを調べてみた。1950年代に米軍により作成・発行された25万分の1地形図で確認したところ<sup>5)</sup>(図4)、現在ナガオン市の南側にあるアホミヤの村落は当時から存在するのに対し、ベンガリ・ムスリム移民の村落はナガオン市から北側に一部みられるものの、現在のように河川近傍には分布域が広がっていなかったことが読み取れる<sup>6)</sup>。河岸の氾濫原地帯に村落名はほとんど記載されておらず、草地を示す地図記号が描かれている。地図

上に表記がないことは必ずしもそこに人が住んでいなかったことを示すものではなく、何らかの形で土地を占有する人がいた可能性もあるが、人口が少数であったために村落を形成するに至っていなかったと考えられるであろう<sup>7)</sup>。

次に1970年にインド測量局 (Survey of India) より発行された5万分の1地形図で村落名を確認すると(図5)、現在の村落のほとんどが既にこの時代には存在していたことが分かる。アホミヤの村落だけでなく、ムスリム移民の村落も現在の立地場所である氾濫原地帯に設立されている。この変化が生じた背景として、1960年頃にブラマプトラ川の南岸に建設された堤防の役割が大きいと考えられる。アッサム州ではイギリス植民地時代には大規模な堤防が建設されることはなかったが、独立後の1954年から主要河川沿いに堤防の建設が開始され、1978年までの25年間に総延長4,000 kmに及ぶ堤防が完成した (Kar, 2014)。調査地においてもブラマプトラ川の本流沿いに新たに堤防が建設されたことにより、以前は雨季になると河川水が入り込んで生業活動が困難であった氾濫原地帯でも水制御が容易になり、ほとんど人が居住していなかった地域にも、ムスリム移民の進出が可能になったと考えられる<sup>8)</sup>。

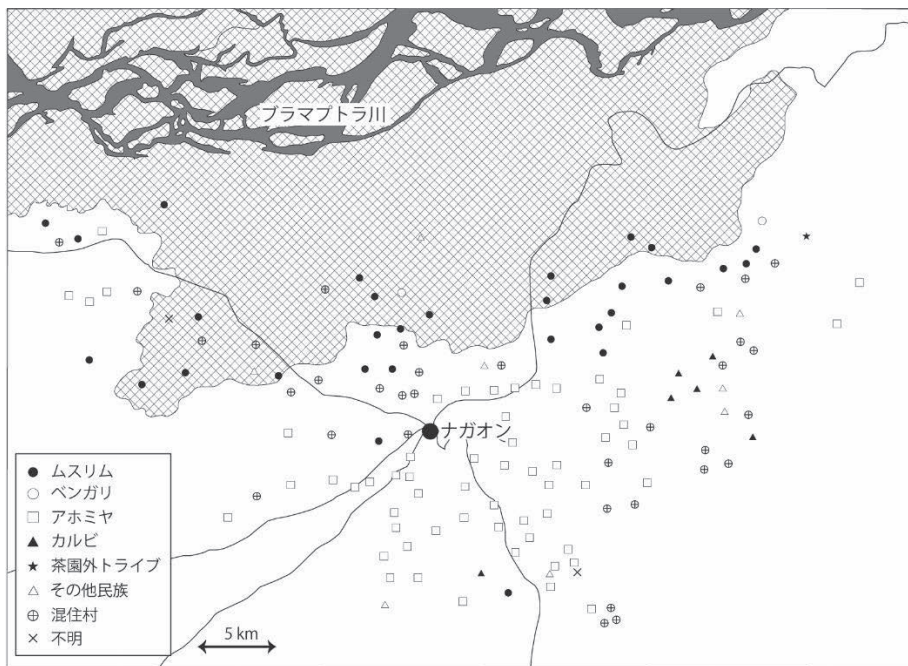


図4 1950年頃の村落分布

注1：現存の村落のうち当時の地形図上に村落名の表記があるものを表示した。  
 注2：網掛け部は地形図上で荒地の地図記号がついている地域を示す。  
 資料：米軍作成の25万分の1地形図より作成。

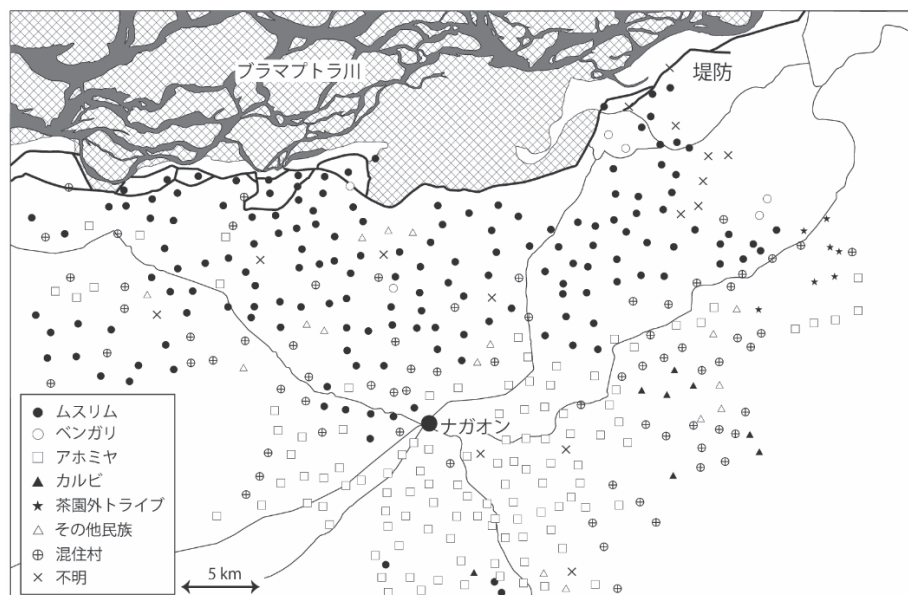


図5 1970年頃の村落分布

注1：現存の村落のうち当時の地形図上に村落名の表記があるものを表示した。  
 注2：網掛け部は地形図上で荒地の地図記号がついている地域を示す。  
 資料：インド測量局発行の5万分の1地形図より作成。

以後本研究では、上述のようにして1950年代以降にブラマプトラ川の氾濫原地帯に設立されたとされるムスリム移民の村落の1つ、シトルマリ・ビル村(以下C村)で行った現地調査に基づき報告する。シトルとはこの地域で捕れる淡水魚の現地名であり(学名 *Notopterus chitala*)、マリとはアッサム語で「捕まえる」という意味である。ビルとは自然の沼沢のこと

で、村落名はこの地に現在もあるシトルマリ・ビルという池に由来している<sup>9)</sup>。諸々の制約により全世帯を訪問して悉皆調査をすることができなかったため、正確な世帯数は不明であるが、村人からの情報と衛星画像から読み取れる家屋数を基に判断したところ、村には約400世帯が暮らしていると推定される<sup>10)</sup>。また村内はベンガリ・ムスリムの住民が過半数を占めている

が、他にベンガリ・ヒンドゥー教徒、同じくヒンドゥー教徒のビハリ（ビハール州出身者という意味）も住んでいる<sup>11)</sup>。

C村の設立に関して村人に尋ねたところ、過去の地形図の分析結果を裏付けるかのように、1950年代以降に近隣県のベンガリ・ムスリム村落から移住してきた人々によって設立されたという情報が得られた。C村はその設立当初は、ブラマプトラ川南岸沿いの堤防の外側に位置していたが、その後1960年代に主要堤防の外側にさらに輪中状に別の堤防が建設された結果、現在は村域の南半分が堤内、北半分が堤外にあるという形になっている。つまり村内の南側と北側で水文環境が大きく異なっている<sup>12)</sup>。

## 2. ムスリム移民の社会的状況

村落調査の結果に入る前に、ムスリム移民が置かれている社会的状況を統計資料の分析により説明する。2011年度の村落レベルのセンサス（village directory）から得られる情報を、聞き取り調査によって得られた民族毎に分類して平均値をとることで、調査地域のムスリム村落とヒンドゥー村落（アホミヤ）の特徴を比較してみる（表2）。

表2 ムスリム村落とアホミヤ村落の社会統計

	ムスリム村落	アホミヤ村落
サンプル村落数	191	141
平均世帯数	598	313
平均人口	3166	1446
0-6歳人口比率(%)	19.4	10.8
世帯人員数	5.4	4.6
識字率(%)		
男性	53.9	79.7
女性	49.7	73.9
合計	51.9	76.9
人口に占める労働者比率(%)		
男性	50.6	56.5
女性	8.8	23.8
合計	30.2	40.4
労働者に占める業種構成(%)		
農業自営者	44.0	35.6
農業労働者	28.2	13.1
家内制工業	3.1	6.7
その他	24.8	44.6

資料：2011年度センサス村落要覧、現地調査より作成。

調査地におけるムスリム村落（N=191）を単純に平均したところ、村内の世帯数は598戸、住民数は3,166人となり、世帯数・住民数ともに、アホミヤ村落（N=141）の平均よりも多いことが分かった。世

帯数のみならず、世帯人員数もムスリム村落では5.4人で、アホミヤ村落の4.6人を上回っている。特に村の全人口に占める0-6歳の人口比率は、ムスリム村落が19.4%に対して、アホミヤ村落は10.8%であり、ムスリム村落で出生率が非常に高いことが分かる<sup>13)</sup>。

識字率について比較してみると、ムスリム村落の平均値はアホミヤ村落の平均値を25%超も下回っている。いずれの集団でも男性に比べて女性のほうが識字率は低くなっているが、とりわけムスリム村落の女性の識字率は50%を下回る水準にとどまっている。ムスリム村落の住民の識字率が顕著に低い理由として、村人への聞き取り調査では、村周辺には高校までしかなく高等教育機関に通わせるには遠方の都市部まで出て行かなければいけないこと、働かせるために両親があえて子供を学校に通わせないこと、実際に学校を出ても専門知識を生かした就職先がないこと、などが挙げられた。

次に労働者の比率を比較したところ、識字率ほど顕著ではないもののムスリム村落とアホミヤ村落で差異がみられた。つまり、ムスリム村落の住民のほうが、統計の上では、労働に従事している比率が男性で約6%、女性で約15%、アホミヤ村落より低いのである。宗教上の理由もあり、ムスリム女性の労働比率は10%未満と低い水準にとどまっている。労働内容の内訳をみると、ムスリム村落の住民は、農業自営者（Cultivator）、農業労働者（Agricultural labourer）の比率が高く、農業関連のこれら2部門だけで全労働人口の約72%を占める。一方のアホミヤ村落の住民は、農業関連部門に従事している比率は約49%と全労働者人口の半数以下で、その他の農外労働（Other）に従事している割合がムスリム村落の2倍近くになっている。

以上より、調査地域では、ヒンドゥー教徒のアホミヤは相対的に識字率が高く一定の収入が見込める農外労働に就ける機会に恵まれている一方で、ムスリム移民は若年層の人口比率が高いものの教育・労働機会が乏しく、農業関連の仕事に従事する以外の選択肢が限られている状況にあることが推察される。

統計上の数値からはムスリム移民はアホミヤと比べて社会的に厳しい立場に置かれているということが読み取れるが、調査村における観察からも、社会的状況に関して同様の傾向がみられた。村内では兄弟の数が多いにもかかわらず土地が限られているため、兄弟世帯が同じ敷地内に同居するジョイント・ファミリー制を採っている世帯が複数確認された。教育に関しては上に述べたとおりであるが、筆者が聞き取りをした範

困では、クラス 10（前期中等教育）までしか出ていない若者が多くみられた。村人は教員や銀行に勤めているごく一部の者を除いて、大多数は農業か日雇仕事、または両者を掛け持ちして生計を立てていることも統計データの通りであった。その一方で、実際に調査村に入ってみると、統計上の数字とは異なる印象も受けた。村内はレンガ造りの立派な家が多く、経済力はアホミヤと比べて必ずしも低くないことが示唆されるのである。また、若年層の人口が多いと思われたが、女子は家の中で過ごすことが多いので別にしても、戸外で男子の姿を見かけることが少なかった。このような

統計と実態のずれ、現地での違和感は、彼らの生業活動を調査するなかで原因が分かってきた。

### 3. 調査村の生業活動

本節では現地調査に基づき、ムスリム移民が多数暮らす調査村でみられる生業活動について報告する。調査村では堤防の外側にあたる村域と内側にあたる村域とで水文環境が大きく異なるが、それに応じて住民の生業活動も様相を異にしている（図6）。

堤外地は、6月から9月まで雨季の間は本流の増水により一面が冠水する。場所によっては水深が2～

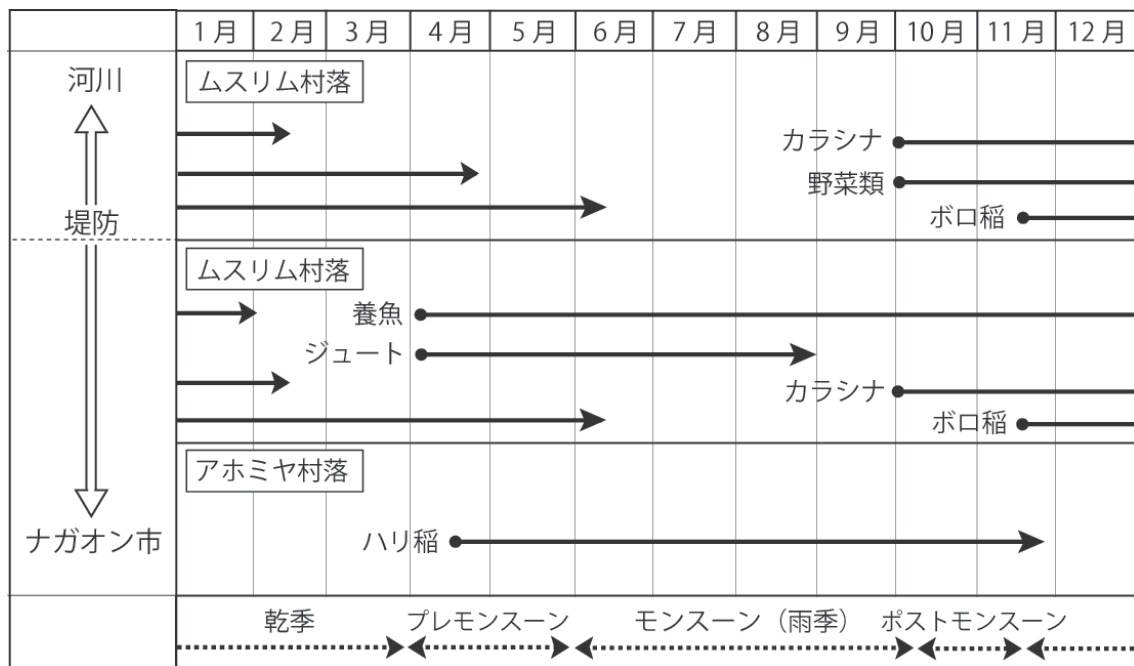


図6 ムスリム村落とアホミヤ村落における生業カレンダー

資料：現地調査より作成。

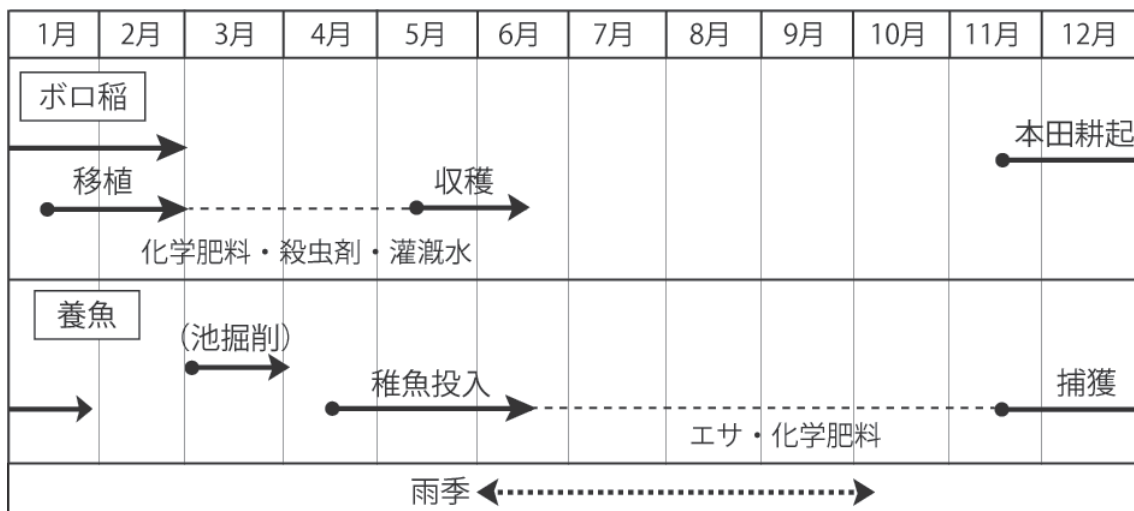


図7 ボロ稲栽培と養魚の作業時期

資料：現地調査より作成。



3mにまで達するので農作業は完全に不可能になる。この期間、村人が網を使って水面下の魚を捕まえる様子もみられるが、これは必ずしも効率的な手法ではなく、利益はほとんど出ない。雨季が終了し水位が低下すると、10月頃から乾季の畑作(チリ、カラシナなど)、続いて12月頃からはボロ稲の栽培が開始される。このとき河川水は完全に引いてしまうために、耕地では管井戸で地下水を汲み上げて灌漑が行われる。

堤内地は全く景観が異なる。ここは堤防が崩れないかぎり河川水が直接流入することはない。しかし地下水水位の上昇と降雨により、雨季になると高位地につくられた道路と屋敷地以外、ほとんどの耕地は湛水してしまう。ここでも雨季に稲を作付することは不可能になる。しかし堤外地とは異なり、雨季でも水文環境は一定程度制御可能であるため、高位地ではジュートが栽培され、それ以外の耕地は魚を養殖するための池として利用される。乾季になるとすべての耕地でボロ稲が栽培される。

調査地域に立地するムスリム村落とアホミヤ村落の最大の特徴が、乾季のボロ稲の有無である<sup>14)</sup>。ナガオン市周辺の自然堤防帯に立地しているアホミヤ村落では、乾季の耕地には作物が何も作付されておらず、稲を収穫した後の田は牛やヤギを放牧する程度しか利用されていない。しかし河川近傍に立地しているムスリム村落へ近づいていくと、乾季でもボロ稲が青々と生育している景観がみられるのである。

調査村で広くみられるのが乾季のボロ稲と雨季の養魚を組み合わせた作付パターンである(図7)。魚の

養殖は4月から開始される。購入してきた稚魚を屋敷地の中にある池に投入し、一定の大きさになるまで育てる。その後、徐々に水がたまりつつある耕地に魚を放つ。養殖される魚の種類は、コイ科のコモンカープ(コイ, *Cyprinus carpo*)、シルバーカープ(レンギョ, *Hypophthalmichthys molitrix*)、グラスカープ(ソウギョ, *Ctenopharyngodon idella*)、バフ(カトラ, *Catla catla*)、ロウ(*Labeo rohita*)、クヒ(*Labeo gonius*)、バゲン(*Labeo bata*)が多く、他にもナマズ科のマグル(キャットフィッシュ, *Clarias batrachus*)やナギナタナマズ科のシトル(ナイフフィッシュ, *Notopterus chitala*)などがある<sup>15)</sup>。雨季の間はカラシナの搾りかすや籾殻をエサとして与えたり、ビタミン剤を投入したりして、冠水した耕地の中で成魚になるまで飼育される。耕地の水位が下がる11月になると魚は網で捕獲され、近くの定期市やアッサム州内の町の市場へと売りに出される。ここで、魚が完全に成育し切るまで待っていると耕地でボロ稲の栽培を開始することができない。耕地では11月からボロ稲のための耕起が始められ、翌年の1月から2月にかけて苗代から本田へ移植作業が行われる。ボロ稲の収穫は5月以降になるが、ここでもボロ稲の収穫時期と稚魚の投入時期が重なってしまう。

雨季の養魚と乾季のボロ稲栽培を同一耕地で行おうとすると、両者の栽培時期が一部重複するという問題が生じるが、調査村では土地利用を工夫することでこの問題を解決している(図8)。村人は耕地の一面を8フィートほど人工的に掘り下げて、乾季でも一定量

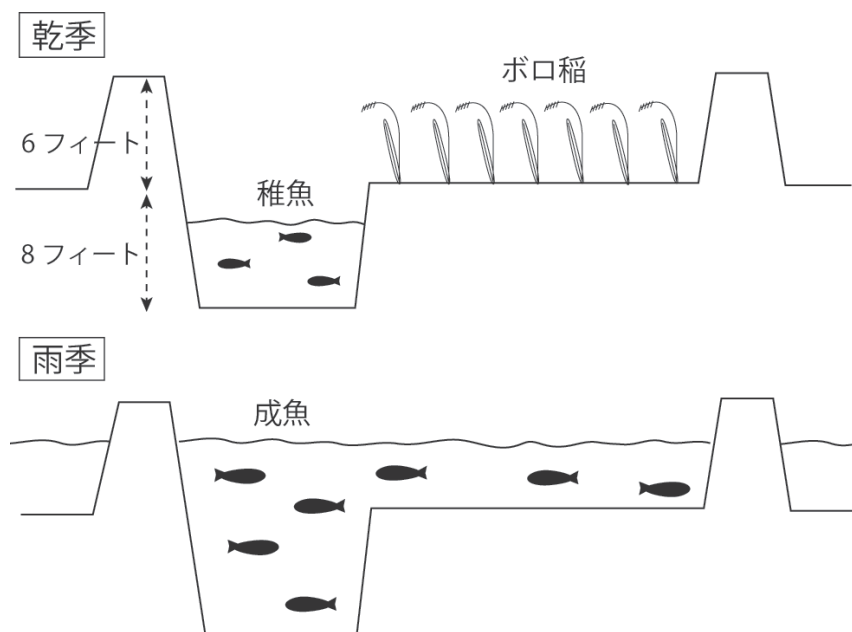


図8 雨季と乾季の耕地利用を示す模式図

資料：現地調査より作成。

の水が溜まるように改変しているのである。ここに雨季前の4月に稚魚を投入する。耕地の反対側ではまだ収穫前のボロ稲が植わっている状態である。雨季に入り降雨が溜まるとともに地下水位も上昇するため、ボロ稲が植わっていた部分も含めて耕地全体が湛水し、魚の飼育に広い面積を使用することができる。その後雨季が終了して水位が低下し始めると、成長した魚の捕獲時期を迎える。魚の捕獲は翌年の1月頃まで続く。このとき、すでに耕地内には人工的に掘り下げられた最低位部にしか水は溜まっておらず、水が完全に干上がった反対側では次のボロ稲栽培の準備が開始され、その一部は種籾を播いて苗代としても利用される。

耕地の一部を掘り下げて養魚とボロ稲栽培を同一耕地内で行うこの技術には、両者の栽培時期の重なりを解消すること以外にも、複数の利点がある。1つはボロ稲栽培を行う前に田の表土が耕起・攪拌されることで、雨季に水位が上昇する際に土壌から水中に無機養分が供給されるのである。これが魚が成育するために必要な養分になるのだと村人は説明する。地中に混ざっていた糞や雑草も水中に溶け出すことで魚の生育にとってはプラスになる。さらにボロ稲の収穫の際には稲穂のみが刈り取られて、下の茎はそのまま田に残されることになる。この残った茎が雨季に水没して腐ることで、やはり魚の良い飼料になるようだ。

多くの村人は、養魚ビジネスの収益率が非常に高いために、魚の漁獲量を増やす目的でその傍らで稲作を行うのだと言う。ボロ稲作は化学肥料代や揚水ポンプのディーゼル燃料代など支出が多い割に単価が低く、収穫物を売却しても収益は限られている。自家で食べるための米を生産するため、また、牛の飼料として藁を生産するために毎年一定のボロ稲を栽培するのである。養魚ビジネスでじゅうぶんな利益を得ることができるため、現金収入源としてはボロ稲作の重要度は高くない。筆者の調査中も、耕地の一部を重機で掘削して、新たに養魚用の池を造成している現場に幾度か遭遇した。

複数の村人の話を総合すると、村内では1990年代に地下水灌漑を用いたボロ稲栽培が広まり、それに続いて集約的な養魚が行われるようになったと推察される。それ以前にも屋敷地の内部に掘られた池で自家消費用の魚を飼育し、余剰分を売却することはあったようだが、雨季の耕地を利用して、化学肥料や飼料を大量に投入して大規模な養魚を行う現在の方法がみられるようになったのは比較的歴史が浅く、2000年頃のことらしい。これは肥料を多量に投入して収量を上げるボロ稲の栽培法を、昔から行われていた養魚に応用

した手法であると考えられる。「今や作物だけでなく魚も肥料を与えて育てる時代だ」と誇らしげに話す村人にも調査中に会った。この飼育技術は稚魚や薬剤など投入材の費用さえ賄うことができれば成魚の売却益が大きいので、単位面積あたりの収量が低い雨季の稲のみ栽培している在来のアホミヤよりもはるかに高い収益をムスリム移民は得ることができる。

養魚ビジネスの初期投資にかかる費用はローンを組んで銀行などから借りる場合もあるが、調査村のムスリム移民の中で特に農外収入をもたない世帯は、アッサム州の外（主としてケーララ州やタミル・ナドゥ州）へ出稼ぎに行くことでその費用を賄っている者が多い<sup>16)</sup>。出稼ぎに行くのは10代後半から30代前半の若年男子が中心で、彼らは出稼ぎ先で木材加工場やタイル製造工場、ホテルの警備などの仕事に就き、短い者で半年、長い者になると10年近く労働に従事する<sup>17)</sup>。その間に貯めた資金を元手にして、村内外の土地を購入したり借りたりするなどして、帰郷後に養魚をはじめとする新たなビジネスを開始するのである。出稼ぎは同郷のつてを頼って若者が順番に出て行く方式、いわゆるチェーン・マイグレーションであるため、一部の世帯のみに資金が集中しているわけではない。村内の多くの世帯に養魚・ボロ稲栽培に挑戦する機会があると言える。

最後に、この集約的内水漁業の技術はどこで開発されて、どのようにして村に導入されたのだろうか。村人の説明によると、彼らは近郊の村落から稚魚を購入して、自らが所有する池で大きくしているということだった。調査村から南に約10 kmの位置にあるその村落を訪問したところ、卵から稚魚を孵化させて、注文に応じて周辺の村落へ売るビジネスを行っているムスリム移民が存在した。彼は屋敷地の裏庭に円形の水槽を複数建造しており、池から汲み上げた水を流し込んで稚魚を孵化させる仕組みを完成させていた。元は村内の学校で教師の仕事をしていたが、1990年代半ばにこの事業を始めたそうだ。では、彼はこの孵化技術をどうやって習得したのだろうか。ナガオン県内のアッサム州漁業局の実験施設を訪問したところ、ここから専門家が州内の希望者のもとへ孵化技術の指導に出向いているようであった。つまり、州政府の技術者から、孵化ビジネス業者、稚魚を購入して養殖を行う末端の村人までネットワークが確立されている。漁業局の技術者は、調査地のムスリム村落に限らず、アッサム州内各地へ技術指導に向かうという。しかし筆者が観察した範囲では、ナガオン県で内水漁業が確認されたのはブラマプトラ川近傍の氾濫原地帯に立地する

ムスリム村落だけであり、その他の在来民の村落ではみられなかった。なぜムスリム移民とアホミヤで技術導入に差異が生じるのだろうか。

#### 4. 在来民族村落との比較

ムスリム村落でみられた生業形態と土地利用を比較するために、C村落から西に約10 km離れた場所に位置し、アホミヤが住民の過半数を占めるドゥムドゥミヤ村（以下、D村）においても調査を実施した。D村はC村と同様にブラマプトラ川の本流から約10 kmの氾濫原地帯に位置し、村域は堤防の内側にある。ムスリム移民が住む村落に四方を囲まれる中で、この地域では数少ない、ヒンドゥー教徒のアホミヤが多数を占める村落である<sup>18)</sup>。

生態環境に大きな差異がみられないにもかかわらず

ず、D村の生業形態はムスリムが暮らすC村のものとは全く異なっている。雨季の耕地では養魚ではなく、アッサム州の他地域と同様に稲作が行われる。雨季に栽培される稲は、低位の田で栽培される直播稲のバオ稲と、高位の田で栽培される移植稲のハリ稲に分類されるが、D村ではその両方がみられる。乾季の耕地ではボロ稲は栽培されず、屋敷地に近い高位の田ではチリやジャガイモなどの畑作が行われるが、それ以外の田には何も作付されず家畜の放牧地として利用される。これはアッサム州の在来民族の村落でみられる典型的な土地利用法である。

D村でみられるように、アッサム州では伝統的に自然の状態の地形起伏を生かす形で土地利用が行われてきた（図9、写真1）。村内で最も標高が高い場所に屋敷地が形成され、背後の後背湿地が耕地として利用

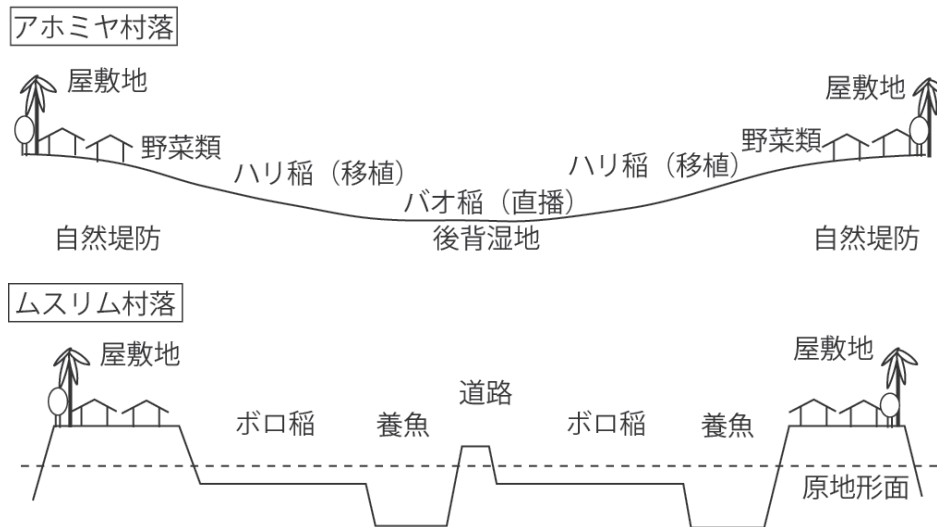


図9 アホミヤ村落とムスリム村落の土地利用を示す模式図

資料：現地調査より作成。



写真1 アホミヤ村落（D村）における土地利用景観  
筆者撮影



写真2 ムスリム村落（C村）における土地利用景観  
筆者撮影

される。雨季に降雨が生じると、高位から低位まで湛水深が異なる耕地が生み出されるので、そこに異なる作物や稲品種を栽培するのである（浅田，2011）。これはD村のみならず古くからさまざまな民族が住みついてきたブラマプトラ溪谷の自然堤防帯で発達している環境適応技術である。ブラマプトラ川に流れ込む支流によって形成された、比較的規模の小さい自然堤防と後背湿地が多数発達する地帯で、頻発する洪水と旱魃の被害を軽減しつつ、さまざまな作物の植え分けを可能にする知恵である（浅田，2014b）。この地で何世代にもわたって暮らしてきたアホミヤは、当地の生態環境に対する知識や経験、愛着に基づいて農業のための土地利用を築き上げてきた（Deka et al., 2011）。

ムスリム村落の土地利用技術はこれに対して、土地を徹底的に改変して自分たちが利用しやすい環境を人工的に作り出すという性格を有している（図9，写真2）。ブラマプトラ川の本流に近い氾濫原地帯では雨季に水量が過剰になるために、自然のままの状態では在来民族の利用には適さなかった。そこでこの地域に移住してきたムスリムは、地面を掘り下げて元の地形面よりも土地を低くすることで乾季の間も水がたまるように工夫し、さらに掘った土を盛り上げて屋敷地の比高を高くすることで雨季の洪水をしのぐことを可能にしたのである。土地利用を平面的のみならず立体的にも捉えて、自在に改変する技術は、アッサム州内の他の在来民族の村ではみられない、ムスリム移民独自のものである。これは彼らがアッサム州に移住してから編み出した技術というわけではなく、ブラマプトラ川下流域のベンガルデルタで広くみられる技術である。

ベンガルデルタは、傾斜がほとんどなく低平地が広がる一般的なデルタ地帯とは異なり、その中に大小さまざまな自然堤防が発達していることが特徴である（海津，1997）。ベンガルデルタを流れる各河川はこれまで幾度も流路を変えてきており、中でもガンジス・ブラマプトラ川本流によって形成された自然堤防は大規模ではっきりとした微高地を形成している。その自然堤防に囲まれた低地には排水不良の後背湿地が広がり、水稻栽培が行われてきた。人口稠密なベンガルデルタでは住民の居住空間がこの広大な後背湿地にまで進出し、そこで人為的な切土・盛土の技術が生み出されたものと考えられている。ベンガルデルタは巨大でありながらも、住民たちが自らの手で居住空間を形成できる程度の微地形を内部に宿しているのである（吉野，2013）。現在、C村で広まりつつある水田養魚もこの土地改変技術をベースに、さらに稚魚孵化技術や化学薬品の使用など最新の技術を導入することで

成立したと推察される。

アホミヤが住むD村でも、屋敷地の中に池を掘り、自家消費のために魚を飼育する世帯はみられるが、それはよそから購入してきた稚魚に飼料や薬品を大量に投入して育てるようなムスリム村落の養魚方式とは全く性質を異にするものである。また、池を掘った際に出た残土も屋敷地の隅に放置されたまま、土地のかさ上げなどに積極的に利用されることはないようであった。ムスリム移民と在来民の間では同じ自然環境でも全く異なる価値を有するものとして捉えられており、それが両者の自然への働きかけのちがいに表れていると考えられる。

## 5. ムスリム移民と在来民の関係

上記のように、ムスリム移民は、元来はアッサム州には存在しなかった技術を外から持ち込むことにより、在来民が居住していなかった氾濫原の自然環境に価値を見出し、高い土地生産性を生み出すことを可能にしたと考えられる。その生産力を基盤に在来民の生存を脅かしているというのが従来の研究の主張であり（木村，2012）、アッサム州社会でも広く共有されてきた言説であった。しかしムスリム移民の村落に四方を囲まれたD村落のアホミヤ住民から聞き取り調査を行ったところ、必ずしもムスリム移民と在来民が常に対立関係にあるとは限らず、むしろムスリム移民の活動によって在来民の生活が支えられている側面もあるということが分かってきた。

一例が食料の生産と供給である<sup>19)</sup>。前述のとおり、ムスリム移民の村落では自然環境を改変して、大規模に養魚や乾季の畑作を行い、彼らは仲介人を通して、もしくは定期市に持ち込んで収穫物を売却することにより現金収入を得ている。彼らの村落で生産された食料はナガオン県内のみならず、アッサム州内の各地に輸送され、多数の在来民に消費されている<sup>20)</sup>。中でもムスリム移民によって供給される魚は、アッサム州のヒンドゥー教徒にとって特別な意味をもつ<sup>21)</sup>。ムスリム村落では雨季が終了して田の水位が低下し始める11月頃から魚の捕獲が本格的に始まるが、水揚げが最盛期を迎えるのは1月である。1月中旬は、アッサム州で年3回祝われるビフ祭りの1つ、マグ・ビフが開催される時期である<sup>22)</sup>。マグ・ビフは前年度の稲の刈取り作業がすべて終了し、農作業が一段落する時期に主にヒンドゥー教徒によって祝われる年中行事である。祭りの期間中は家族・親戚が生家に集まり、魚やアヒルの肉を食べる慣習がある（Borah, 2005）。ビフの前日、ウルカとよばれる日には、農村部では村人

が近くの川や池に出かけて竹製の漁具で魚を捕まえる光景が<sup>23)</sup>、都市部では市場で買い物が客が魚を品定めする光景がみられる。このマグ・ビフの期間中に都市部で暮らすヒンドゥー教徒住民に大量に消費される魚のうち、一定量が今日ではムスリムによって生産・供給されたものである。彼らはこのヒンドゥー教の祭りに直接参加して祝うことはないが、絶好のビジネスチャンスとして利用している。前年の4月から飼育を開始して数カ月間かけて育て上げた養殖魚を、値段が吊り上がるこの時期に、急増する都市住民に向けて出荷することで一気に売りさばくのである。C村には、ウルカの1日だけで10万ルピー以上の売り上げがあったと語る者もいる。

調査地ではムスリム移民から在来のアホミヤへ新しいモノや技術が移転されるばかりではない。その反対にムスリム移民がアホミヤの存在を必要とする場面もみられた。その一つが牛の飼料として必要不可欠な稲藁である。ムスリム移民の村落では農業の機械化が進み、かつては耕起作業に用いられた役牛がトラクターや耕耘機に置き換わりつつあるが、自家消費用の牛乳を得るために牛を飼育している世帯もなお多い。このような世帯では、年間を通して自家の牛に食べさせる飼料を確保することが不可欠であるが、彼らが栽培しているボロ稲の稲藁は飼料としては必ずしも最適ではない。その理由はボロ稲が雨季に入る5月から6月にかけて収穫されることに関係している。稲藁は稲の収穫時に刈り取られて屋敷地内の庭に積み上げて保管されるが、屋外に放置される形になるので雨に濡れて腐りやすくなるのである。牛は雨に濡れて湿った稲藁は好まない。また、C村で栽培されているボロ稲はすべて高収量品種（HYV）である<sup>24)</sup>。一般に高収量品種は多量の化学肥料を投与しても倒伏しないように由来品種に比べて茎が固い性質をもつ。この性質のため、高収量品種の茎および稲藁は牛の飼料には適さないのである。

ボロ稲しか栽培していないムスリム移民の中には、ハリ稲を栽培しているアホミヤの村落から牛の飼料用としての稲藁を購入する者がいる。ハリ稲は雨季が明けた直後の11月から12月にかけて収穫され、その稲藁は屋敷地内でじゅうぶんに乾かした状態で牛に食べさせることができる。また在来民族の村落では高収量品種の普及は限定的であるため（浅田，2011）、飼料用に適した由来品種の藁を入手することができる。そこでムスリム移民はD村やナガオン市近郊のアホミヤの村落に赴き、余剰の稲藁を現金で購入してくるのである。以前は無料で入手することができたが、近

年はどこの村落においても収穫余剰物の希少価値が高まっていることもあり、稲藁の買い取り価格は上昇しつつあるという<sup>25)</sup>。

以上の事例がその一端を示すように、今日のアッサム州社会でムスリム移民の存在は欠かせないものになりつつある。その一方でムスリム移民も自分たちの暮らしを維持するために在来のヒンドゥー教徒たちに依存せざるを得ない側面があり、少なくとも表面的には互いに良好な関係を維持しなければならない。一方的に在来民の生存を脅かす存在であるという従来の見方は、アッサム州社会の中で在来民との共存を図ろうとするムスリム移民の実態を必ずしも正しく捉えているとは言えないだろう。

#### IV. おわりに

本研究ではインド・アッサム州のブラマプトラ川氾濫原におけるムスリム移民の生業活動と土地利用について、在来民と比較することでその特徴を浮き彫りにし、今日のアッサム州社会におけるムスリム移民の位置づけを考察してきた。ムスリム移民の生業活動の特徴として、新技術の積極的な導入、自然環境を改変する形での土地利用、利益を重視するビジネス志向、などの点が確認された。これらの特徴はアッサム州の在来民族とは全く志向を異にするものであり、その異質性ゆえに、彼らは「外からきた異質なもの」とみなされ、在来民の間に不信感を生じさせる一因になっていると考えられる。しかし同時に、食糧生産や技術提供など、在来のアッサム州社会にはない技術をもつムスリム移民の活動は、在来民の生活やアッサム固有の文化にまで深く入り込んでいることも明らかになった。もはや彼らの存在なしではアッサム州社会は成り立たなくなっているのである。

既存研究ではムスリムとヒンドゥーの関係については両者の対立の側面が取り上げられることが多かったが、本研究により必ずしも日常的に対立関係がみられるわけではなく、経済的にはむしろ、2つのコミュニティは緩やかに紐帯しながら共存している関係にあることが示唆された<sup>26)</sup>。では現在両者の間でみられるこのような関係は、どれほどの過去までさかのぼって確認できるものであろうか。住民からの聞き取り調査でははっきりとした事実を確認できなかったが、文献のなかにはベンガリ・ムスリムの移民が開始された直後の20世紀初頭の状況を記述したものもある。Saikia, (2014)によると、ムスリム移民は経済的価値が見出されなかった河岸沿いの荒蕪地を開墾して課税可能な耕地に転換していったので、アッサム州の税収局の役

人からは歓迎されていたようである。住民レベルでも、アッサム人（アホミヤと思われる）の地主にとってムスリム移民は、小作農として雇って新たに土地を耕作させることで自分の取り分が増えるので重宝される存在であった（Das and Saikia, 2011）。また、当時からアッサム州の経済は移民の生産活動に依存する度合いが大きく、両者の間でなんらかの衝突が発生した場合、ムスリム移民は野菜、牛乳、卵などの食料をヒンドゥー教徒に売ることを一時取り止めにして経済システムを麻痺させることもあったという（Saikia, 2014）。したがって、現在みられるような両者の関係は、ムスリム移民がアッサム州にやってきた当初から存在するものであり、ときに衝突を生みつつも一貫して続いてきたと考えることができる。技術の変化とともに両者の間で取引されるモノやサービスの内容に変化はみられたであろうが、経済的な観点から必要に応じて互いに利用し合ってきたというのが、アッサム州におけるムスリムとヒンドゥーの関係と言えよう<sup>27)</sup>。

最後に、持続性の観点からムスリム移民の生業活動について述べておきたい。近年、南アジアでは農業の持続性が問題となっており、早くに「緑の革命」が始まったインド西部乾燥地帯のパンジャブ州のみならず、東部湿潤地帯の西ベンガル州などでも管井戸を用いた過剰な灌漑開発による地下水位の低下が問題になっている（藤田, 2002）。アッサム州の在来民の生業が、雨季の天水を利用して稲を栽培し、乾季は作物をほとんど栽培しない代わりに牛を放牧して地力の回復を図るといふ、土地生産性は決して高くないが持続性に優れるものであるのに対し（浅田, 2011）、ムスリムの村落では年間を通して耕地が利用されており、特に乾季は地下水を汲み上げてポロ稲が栽培されている。彼らの技術は人為的な自然改変の度合いが大きく、資源の枯渇が懸念される。この点について住民にも確認したところ、灌漑を行うのは主にポロ稲の栽培初期にあたる1月から3月のことであり、年間を通して地下水を汲み上げているわけではないので地下水位低下の心配はないだろうということであった。また、調査村落で使用されている動力源は性能が高い外国製ではなく、比較的性能が劣るインド国内メーカーのモーター<sup>28)</sup>であり、井戸の深さも20~30フィートとさほど深くはない。ナガオン県はアッサム州の中では少雨地帯にあたるものの年間降水量は1,660 mmあり（Government of Assam, 2014）、降水量の少ないパンジャブ州などは事情が異なり、地下水の涵養はじゅうぶん行われていると考えられる。むしろアッサム州では調査地も含めて地下水資源はほとんど活用さ

れておらず、耕地の利用率を上げるためにも地下水の利用を強化すべきであるという主張も根強い（Dutta, 2012; Hazarika and Bora, 2014）。

ではムスリムの生業活動は、持続性にまったく問題がないと言えるのであろうか。雨季に入ってから無降雨日が続いていた2015年8月に調査村落を再訪したところ、前年の同時期には全面で養魚が行われていた耕地では水位が大幅に低下しており、耕地の一部にしか水がたまっていない状態がみられた。水が干上がって地面が露出した箇所は、養魚が行われていないばかりか何も作付けされておらず、ただ雑草が生えているのみであった。耕地の冠水面積が小さい状態が続けば、その中で飼育されている魚は自由に泳ぎまわることができず、そのサイズがじゅうぶん大きくなる前に捕獲時期を迎えることになる。結果として重量が減少することになり収益も下がってしまうと推測される。耕地の食料生産機能を縮小してまで経済的利益を追求するという野望のもと、既存の水田を養魚池に転換するという現在の傾向は当面続くことが予想されるが、内水漁業は水文環境の変化や経済動向に影響される不安定性を抱えており、未だ発展途上の技術であると言えよう。アッサム州社会の中で生存していくために、絶えず新しい技術を取り入れて適応を図ってきたのがムスリム移民である。彼らの手にかかれば、現在の技術の欠点も近い将来に克服されるかもしれない。

本稿では主としてフィールドワークによって得られた現在の生業活動と土地利用に焦点を当てたが、今後は彼らがどのようにして独自の生業体系を築いてきたか、その歴史的な変容過程についても明らかにする必要があるだろう。また、なぜアホミヤが新技術を導入せず農業生産性が低いままでも村落生活を成り立たせることが可能になっているのか、という点についても調査を進めていきたい。

## 付記

現地調査を行うに当たり、ノウゴン女子大学地理学科のSmarajit Ojah 助教、ガウハティ大学地理学科のNityananda Deka 助教、ならびに調査村の方々には大変お世話になった。本稿の一部は科学研究費補助金・研究活動スタート支援「インド、ブラマプトラ川河岸に住む外来住民と在来住民の「洪水とともに生きる知恵」」（研究代表者：浅田晴久、課題番号25883007）を使用した。本稿は、2015年9月26・27日に開催された日本南アジア学会第28回全国大会において実施されたパネル・セッション“Resources and Environmental Issues in Contemporary India”での発表をもとに作成したものである。

## 【注】

- 1) アッサム州で発行されている大手日刊紙も、記事内でムスリム移民を社会に対する脅威とみなす傾向があったと指摘されている (Kimura, 2001)。
- 2) ムスリム人口比率の高いアッサム州西部の県では、ブラマプトラ川沿いにバングラデシュから移民がやってきたと考えられるが、聞き取り調査によると、ナガオン県のムスリム移民は主としてバングラデシュ北東部 (シレット) から丘陵地帯を抜けて内陸沿いにブラマプトラ川中流域に到達したと考えられる。当時のナガオン県は川沿いの氾濫原が未利用の状態であったため、ムスリム移民の割合が特になくなったと考えられる。なお、旧ナガオン県 (1989年に分離した西隣のモリガオン県を含む) のムスリム人口は、1901年で12,578人 (県全体の4.8%)、1951年で359,519人 (同40.5%)、1961年で499,320人 (同41.2%)、1971年で662,181人 (同39.4%)と推移している (Barooah, 1978)。
- 3) アホミヤ (*Axomiya*) とはアッサム語でアッサム人という意味である。広義にはアッサム州に居住する全ての住民を指すが、狭義にはアッサム語を母語とする者、かつ指定トライブとその他後進諸階級以外のヒンドゥー教徒を指す。本研究では後者の意味で使用する。
- 4) アッサム・ムスリムは混住村の中に含まれているが、彼らが主要住民として多数を占める村落は聞き取り調査からは得られなかった。
- 5) テキサス大学オースティン校図書館がウェブ上で公開しているものを使用した。なお、本稿の対象地域では、第2次世界大戦終戦までに外邦図も作成されており、東北大学附属図書館/理学部地理学教室が公開しているウェブサイトで閲覧することも可能である。
- 6) 1947年の独立以前には、現在のアッサム州ではベンガル移民の無秩序な入植を規制し、在来民の土地を保護するための Line system という制度が存在していた (Guha, 2006)。この制度では、移民が居住できる地区と在来民が居住できる地区が分けられたが、実質的な効果はほとんどなかったとされている (Saikia, 2014)。独立後の1950年代に発行された地形図上の村落分布に、この制度の影響がどの程度残っているかは不明である。
- 7) このような河川近傍の無人の土地や中州では、パムと呼ばれる移動耕作が当時の在来民により行われていた。雨季の稲作生産を補う形で、カラシナや豆類などの乾季作が一時的に小規模で生産されていたとされる (Goswami, 2012)。
- 8) ブラマプトラ川氾濫原地帯に移住した後も、洪水や浸食により土地を失い、州内の別の場所へ再移動を余儀なくされた移民もいた。たとえば、1930年9月に発生した洪水により、当時のナガオン県西部 (現在はモリガオン県として分離) に住んでいた多くの移民が土地を失ったことが報告されている (Goswami, 2012)。
- 9) C村に限らず、調査地周辺でベンガリ・ムスリム、ベンガリ・ヒンドゥーが居住する村落の名称は、魚の名前に由来するものが多い。
- 10) C村の世帯数は、2011年度センサスでは268戸である。
- 11) C村における調査は主としてベンガリ・ムスリムを対象に行ったが、一部はベンガリ・ヒンドゥー、ビハリの情報も含んでいる。生業活動や土地利用に関して、村内のコミュニティ間で明瞭な差異はみられなかった。
- 12) 1970年インド測量局発行の5万分の1地形図と最新の衛星画像を比較してみると、1970年頃にはC村はブラマプトラ川本流の河岸沿いにあったが、その後の土砂堆積により河岸線が北側に前進し新たな土地が出現している。現在、C村の北側の河岸沿いの土地には別のムスリム移民の村落が形成されているが、センサスには登録されていない。
- 13) 全インドにおけるムスリムとヒンドゥーの出生率の差については、女性の教育レベルの重要性が指摘されているが、「ムスリム」という宗派カテゴリーがもつ要因についてはさまざまなメカニズムが議論されており不明点も多い (近藤, 2009)。なお、19世紀における東ベンガルにおいても、ムスリムがヒンドゥーに比べて高い人口増加率を示すことが分かっており、次のような要因が挙げられている (白田, 1993; 河合, 2015)。すなわち、ムスリムは離婚も再婚も自由であること、肉食を許す食生活であること、ヒンドゥー教徒よりも通婚圏が広いこと、極端な若年婚が少なく夫婦の年齢差が小さいこと、ムスリム農民は相対的に裕福でありモスクを中心に相互扶助的な集団を形成したこと、などである。
- 14) 第2次世界大戦中に実施された Grow More Food Scheme のため、精力的に食糧生産を行っている移民は当時のアッサム政府から簡単に追い払われたりしないであろうと考えられていた。ムスリム移民は当時から乾季も含めて1年中耕地で作物を栽培していたが、それは政府が追放計画を実行するのを困難にさせるための知恵であろうと言われている (Saikia, 2014)。
- 15) 魚の名称はすべてアッサム語の発音をカタカナ表記したものである。
- 16) 出稼ぎに出る若者の多く (筆者が詳しい話を聞いた6名中5名) が農業か日雇仕事で生計を立てている世帯の一員であった。雨季の間に出稼ぎに行き、乾季になると帰郷して実家の農作業の手伝いをする、という若者もいた。
- 17) 職種によって異なるが、工場での労働は日給約400ルピー (2017年2月の時点で1ルピーは約1.7円) で、月給にすると10,000~12,000ルピーになる。ある若者は2ヶ月に一度の頻度で5,000ルピーを実家に送金するというのであった。この額は養魚ビジネスから得られる収入に比べると決して多くはないが、世帯の年収に占める割合としては無視でき

るものではなく、ムスリム移民の経済状況を改善させる要因の一つになっているものと考えられる。なお、州外への出稼ぎはアホミヤの村落では比較的少ない。

- 18) 周囲をムスリム移民に囲まれるようになった現在もヒンドゥー教徒住民がD村に住み続けている理由の1つとして、15世紀のヒンドゥー教改革者でありアッサム州内で広く信仰されているシャンカル・デヴにまつわるサトラ(宗教施設)が付近に残されていることがあげられる。
- 19) ムスリム移民から在来民へは食料の供給だけでなく、技術の提供もみられる。D村における聞き取り調査では、ムスリム移民から栽培技術を学ぼうとするヒンドゥー教徒住民がいることも分かった。著者は直接確認することができなかったが、周辺のムスリム移民がボロ稲栽培を始めたのを見て、個人的な知己を頼りにその技術を学んでいる村人もいる。
- 20) 筆者の知人のヒンドゥー教徒の中には、ムスリム移民が乾季に生産・供給する野菜によって、アッサム州の都市部の食生活が豊かになったと語る者も多い。一方で、その野菜は薬品に汚染されていると言って食べたがらない者もいる。
- 21) アッサム州における魚類の1人当たり消費量は、2001年センサスの人口を元に計算すると年間7.5kgとなり、インド平均の9.0kgよりは低いと推定される(Bhuyan and Dutta, 2009)。アッサム州の中ではナガオン県が漁獲高26,184トン(2012年度)と最も多い(Government of Assam, 2014)。
- 22) 4月半ば(地元の暦で正月にあたるボハグ月の初日)にボハグ・ピフ、10月半ば(7番目の月にあたるカティ月の初日)にカティ・ピフ、1月半ば(10番目の月にあたるマグ月の初日)にマグ・ピフが開催される。
- 23) アッサム州にはケオット Keot という漁民カーストが存在する。ケオットはかつては魚捕りや漁具の製造などを生業とすることが多かったが、近年は農業に転換する者が多い。人口はアッサム州内で23,511人(2001年)であり、ムスリム人口とは比べものにならないほど少ない(Roy and Biswas, 2014)。なお、アッサム州はよその州に比べてカーストによる禁が厳格ではなく、自家消費のためであればヒンドゥー教徒も自由に魚を捕ることができる。しかし魚の販売は誰もが自由に行えるわけではない(Cantlie, 1984)。
- 24) 調査村落で栽培されているボロ稲の品種としては、IR8, No. 9, NHC など、村人がオフィス米と呼ぶ高収量品種が多数確認された。Bangladesi, Bihari といった、州外から持ち込まれた、ないしは州外から来た移民が独自に栽培していることをうかがわせる名称の品種もあった。
- 25) 稲藁の買い取り価格は、片手で掴める束(ムティという)1つにつき4ルピーである。
- 26) 調査地域で隣り合わせて暮らすムスリムとヒンドゥーは普段は険悪な関係にはないが、1983年のネリー虐殺事件(Kimura, 2013)や1992年の北インドのアヨーディア事件な

ど、よその地域で大規模な宗派間対立が生じた際はメディアを通じて憎悪が煽られるために、隣人との関係が急速に悪化したという話が聞かれた。バングラデシュの村落においても、マジョリティであるムスリムとマイノリティであるヒンドゥーとの関係は日常的には表面化することはないが、宗教行事や利害対立、襲撃・強盗のような事件を契機として不満や不安が噴出するという(杉江, 2014)。

- 27) ムスリム移民は当初から在来民が居住していなかった河岸沿いに住み着いて独自の生業活動を行っており、アホミヤの生業活動とは直接的には競合しないため、かつては対立関係もほとんどなかったと思われる。コミュニティ間の対立が表面化ようになったのは、人口が増えて、現金経済の比重も高まってきた20世紀後半以降のことである。
- 28) C村では主としてUsha社やKilroskar社など国内製品が使用されていた。

#### 【文献】

- 浅田晴久(2011):タイ系民族アホムの稲作体系—インド, アッサム州の村落における事例研究—。人文地理 63(1), 42-59.
- 浅田晴久(2014a):インド北東地方の生態環境と多民族社会—アッサム州ブラマプトラ川渓谷の事例より—, 広島大学現代インド研究 4, 29-40.
- 浅田晴久(2014b):インド・アッサム州, 稲作体系と気候変動. 宮本真二・野中健一編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻 自然と人間の環境史』海青社, 297-318.
- 白田雅之(1993):ベンガルのイスラム化. 佐藤宏・白田雅之・谷口晋吉編『もっと知りたいバングラデシュ』弘文堂, 52-62.
- 海津正倫(1997):ガンジスデルタの地形. 貝塚爽平編『世界の地形』東京大学出版会, 108-120.
- 河合明宣(2015):集落(自然村)形成史:歴史学—バングラデシュを事例として—. 河合明宣編『地域の発展と産業』放送大学教育振興会, 127-143.
- 木村真希子(2012):先住民の土地喪失と移民との紛争—インド北東部の移動耕作民の事例より—. 松野明久・中川理編『フード・セキュリティと紛争』大阪大学グローバルコラボレーションセンター, 95-107.
- 近藤則夫(2009):インドにおけるムスリムと他のコミュニティの社会的格差について:近年の研究動向と政策. 平島成望・小田尚也編『包括的成長へのアプローチ:インドの挑戦』アジア経済研究所, 115-134.
- 杉江あい(2014):バングラデシュ農村におけるヒンドゥー社会の変容—タンガイル県B村を事例として—. 人文地理 66(4), 1-23.
- 野間晴雄・グルン・ロシャン(2011):インドにおける中国茶・



- アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察，関西大学文学論集 61(1)，65-92.
- 藤田幸一 (2002)：インド・西ベンガル州の農業発展と管井戸灌漑，アジア経済 43(7)，2-22.
- 横山智 (2013)：生業と資源を捉える視点，横山智編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第4巻 資源と生業の地理学』海青社，13-33.
- 吉野馨子 (2013)：『屋敷地林と在地の知恵—バングラデシュ農村の暮らしと女性』京都大学学術出版会.
- Ahmed, K. A. (2010): *The Muslims of Assam*. EBH Publishers, Guwahati.
- Allen, B. C., Gait, E. A., Allen, C. G. and Howard, H. F. (1909, reprinted 1979): *Gazetteer of Bengal and Northeast India*, Mittal Publications, New Delhi.
- Baruah, S. (1999): *India against Itself: Assam and the Politics of Nationality*, Oxford University Press, New Delhi.
- Barooah, D. P. (1978): *Assam District Gazetteer; Nowgong District*, Government of Assam, Guwahati.
- Bhagabati, A. K. (1999): Cultural adaptation in the river islands of the Brahmaputra, Assam, *Northeastern Geographers* 30(1&2), 35-44.
- Bhagabati, A. K. (2004): Cultural Adaptation in the river islands (Char areas) of the Brahmaputra (Assam). Neelam Grover and Kashi N. Singh eds: *Cultural Geography: Form and Process*, Concept Publishing Company, New Delhi.
- Bhagabati, A. K. and Das, M. M. (1992): Agricultural performance in Different Ecological Zones. Mohammad, N. eds: *The Ecology of Agricultural System, International Series in Geography No. 4*, Concept Publishing Company, New Delhi.
- Bhattacharyya, H. K. (2001): *The Silent Invasion (Assam versus Infiltration)*, Spectrum Publications, Guwahati.
- Bhuyan, P. C. and Dutta O. K. (2009): Strategic Management for Enhancing Fish Production in Assam, Bhuyan, R. N., Ghosh, D. and Sarma, D. eds: *Fish and Fisheries in North East India: Recent Advances and Rebuilding*, Geophil Publishing House, Guwahati.
- Borah, U. (2005): *Bihu Festival of Assam: Music, Dance and Performance*, B. R. Rhythms, Delhi.
- Cantlie, A. (1984): *The Assamese; Religion, Caste and Sect in an Indian Village*, Curzon Press, London and Dublin.
- Das, D. and Saikia, A. (2011): Early Twentieth Century Agrarian Assam: A Brief and Preliminary Overview, *Economic & Political Weekly* XLVI 41, 73-80.
- Deka, N., Bhagabati, A. K. and Ando K. (2011): Rural Land Use in the Brahmaputra Floodplain Environment, Assam: The Case of Muktapur Village, *Contemporary India* 1, 177-193.
- Dikshit, K. R. and Dikshit, J. K. (2014): *North-East India: Land, People and Economy*, Springer, Dordrecht.
- Dutta, M. K. (2012): Institution of Ground Water Market for Management of Ground Water Resource: A Study from Assam in Northeast India, *56<sup>th</sup> AARES annual conference*, Fremantle.
- Gait, A. (1906, reprinted 2006): *A History of Assam*, Surjeet Publications, Delhi.
- Goswami, R. (2012): Floods and Fields in the Brahmaputra Valley: 20<sup>th</sup>-century Changes in Historical Perspective. Krishna, S. eds: *Agriculture and a Changing Environment in Northeastern India*, Routledge, New Delhi.
- Government of Assam (2014): *Statistical Hand Book Assam 2013*, Directorate of Economics and Statistics, Guwahati.
- Guha, A. (2006): *Planter Raj to Swaraj: Freedom Struggle and Electoral Politics in Assam 1826-1947*, Tulika Books, New Delhi.
- Guha, P. K. (2007): *The Moria Muslims of Assam: A Study on the Cultural Variability and Drift*, Abhijeet Publications, Delhi.
- Harlalka, S. S. (2008): *Bangladeshi Invasion*, Omsons Publications, New Delhi.
- Hazarika, P. and Bora, A. K. (2014): Ground Water Resources of Darrang District (Old), Assam: Utilization and Management Issues, *Journal of Geography and Earth Sciences* 2(2), 35-47.
- Kar, M. (2014): *The Brahmaputra: Flood and its preventive measures*, EBH Publishers, Guwahati.
- Kimura, M. (2001): Mass Media and Ethnic Group Formation: Comparative Analysis of Newspaper Reports on the Foreign Nationals Issue in Assam and West Bengal, 1979-1985, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 13, 142-160.
- Kimura, M. (2013): *The Nellie Massacre of 1983: Agency or rioters*, SAGE Publications, New Delhi.
- Mishra, P. K. (2014): *Bangladesh Migrants: A Threat to India*, Gyan Publishing House, New Delhi.
- Roy, N. R. and Biswas, N. B. (2014): *Education of Scheduled Caste in Assam*, EBH Publishers.
- Saikia, A. (2011): *Forest and Ecological History of Assam 1826-2000*, Oxford University Press, New Delhi.
- Saikia, A. (2014): *A Century of Protests: Peasant Politics in Assam Since 1900*. Routledge, New Delhi.

(2016年11月8日受付)

(2017年2月20日受理)

## **Livelihood and Land-Use Pattern of Immigrant Muslim Communities in the Brahmaputra Floodplain in Assam: A Comparative Study of Immigrant and Indigenous Communities**

**Haruhisa ASADA\***

\*Faculty Division of Humanities and Social Sciences, Nara Women's University

**Key words:** Assam, floodplain, Muslim, technology, land use

Assam is one among the states with the highest Muslim population in India. According to the Population Census 2011, Muslims recorded 34% of the total population in the state, with a 3% increase in the last decade. The increasing Muslim population in the last several decades is mainly due to the immigration from East Pakistan and Bangladesh, which induced several conflicts regarding land resources with the local indigenous Hindu communities. Although the conflicts between the immigrant Muslims and indigenous Hindus are often reported in the media and argued in sociological studies, fieldwork-based studies on the livelihood of the immigrant communities in the locality are scarce. This study tries to reveal the differences in the agricultural practices and land-use patterns of immigrant and indigenous communities in the Brahmaputra floodplain and examines the sustainability of the multi-ethnic society of Assam. In Nagaon district of central Assam, it was found that the residential areas of immigrant and indigenous communities were clearly demarcated based on the ecological environment. Immigrant communities built their villages by the riverbank plain of the Brahmaputra, a region where river water inundates seasonally, while the indigenous community lives mostly by the central plain near towns. To adapt to excessive water and flooding, the immigrant people have developed intensive fish farming in the rainy season and Boro rice cultivation in the dry season by modifying the original flat topography and introducing artificial groundwater irrigation. Their adaptation techniques to the existing environment are entirely different from those of indigenous villages, and they are able to generate higher productivity per unit of land. These techniques resulted in considerable differences in the livelihood and income of both communities. However, economic linkages have also been found from the field observations suggesting weak ties between the communities.